

## <国語科> (モデル授業)

### 「わからないこと」がわかるための授業実践 ～古典を読み深めるための土台作り～

教諭 小野敬子

#### はじめに

主体的・対話的に学習するためには、生徒自身が思考せねばならない。そして、思考するためには土台が必要である。本校生徒は、興味や関心の無いことについて学習意欲が低い。特に古典文法に対する学ぶ意欲が低いように感じた。そこで、基礎的・基本的な力(土台)を身につけさせるためには、まず興味や関心を引き出す必要があると考え、実践した。

#### 1 取組の概要

##### (1) 趣旨

- ア 生徒が漢文訓読のきまりの、理解できる点とできない点を自己認知する。
- イ 理解できない点は聞き、分かる範囲で説明し合うことで知識の理解を深める。

##### (2) 対象

1年6組 25人(男子:2人, 女子:23人)

##### (3) 計画

- ア 第一学習社「高等学校 国語総合」の教科書にある『訓読に親しむ』を題材とする。
- イ 暗記させるのではなく、構造を理解させるよう工夫する。
- ウ きまりに沿って、訓読文を書き下し文にすることを目標とする。

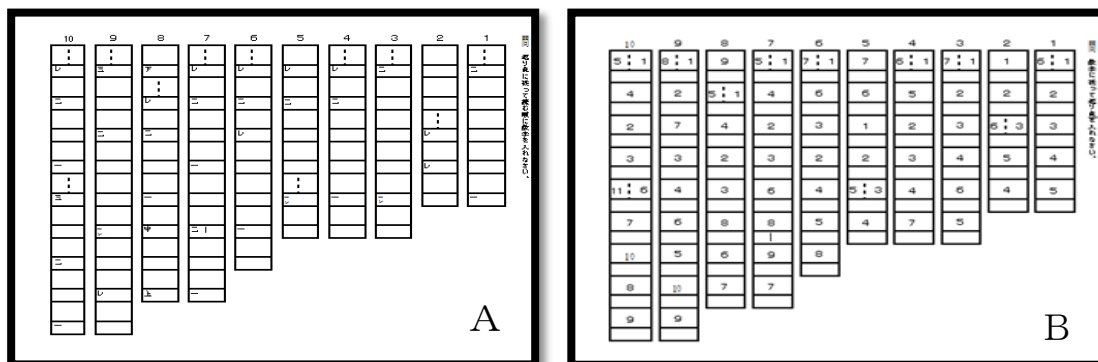
##### (4) 方法

- ア 漢文のプリントを返り点に従って数字を入れていくものと数字に従って返り点を入れるものの2種類用意した。
- イ 個人で問題に取り組みさせた後、他者と教え合いながら正答を導き出させた。

#### 2 研究内容

##### (1) プリントの問題を解く

- ア 下記のような2種類のプリントを用意した。



- イ A (B) のプリントを配布し、以下のことを指示した。

##### ①自力で解く。(10分～15分)

- ・教科書やノートなど何を見ても良いが、相談せずに解くこと
- ・分からない問題のどこが分からないかを明確にすること

②自分の解答を模範解答にする。(15分～20分)

- ・席を離れて誰と話しても良い
- ・疑問点は全て解消する
- ・自分の解答に自信が持てるようにする

③相互採点の後、B(A)のプリントを用い、答え合わせをする。(10分～15分)

- ・相互採点の際、互いに解答が違うところをチェックする
- ・チェックの問題について、疑問点があれば質問し、解消する



## (2) 評価

### ア 自己評価

- ① 分からないところをチェックできた
- ② 分からない問題をなくすことができた
- ③ 分かる問題を人に教えることができた
- ④ 本日の理解度

以上①～④の項目について、A～Eの五段階評価で自己評価させた。

### イ 教員による評価

生徒の活動を観察し、問いの取り組み方・話し合いに対する積極性・自主性を評価し、生徒の自己評価シートの内容と合わせて、A～Eの五段階で評価した。

## 3 成果と課題

### (1) 成果

文法事項の理解を講義式の授業展開で行うと、こちらが説明すればするほど、生徒の理解を妨げているように感じるが多かった。しかし、この形式で行うと、理解度が増していることを実感することができた。

要因として考えられるのは、説明する言葉である。生徒同士が生徒たちの言葉で説明し合い、理解し合おうと活動すると、教室のそこそこで「わからん」「わかった」という言葉が飛び交う。私では考えつかないような説明で、友人を納得させている生徒たちの姿は、ひとつ大きな成果であった。

今後も土台作りはこの方法を軸に行っていく。

### (2) 課題

今回の授業を通して、古典作品に対する理解や読みが深まったとはいえない。まだ、作品を読む前段階の内容だからである。今回は、古典嫌いが多く出る文法の内容で、いかに興味を持たせ、「わかった」という感覚を持たせるかに重きを置いた。

今後は、彼らの「わかる」ものを用いて、書き下し文にしたり、口語訳をしたりすることを経て、内容への理解、読みを深めていく授業へとつなげていく必要があると感じる。

最近の授業では、「口語訳はできたけど意味は分からない」の壁が立ちはだかっている。口語訳から内容にいかにも迫らせることができるか、古典作品をいかにも身近に感じさせることができるかが、今後の課題である。

## おわりに

漢文入門の訓読のきまりを題材とし、いかに古典に対する抵抗感を減らし、興味関心を持たせることができるか、に重きを置いた授業を展開した。はじめは、席を立てて聞きに行ったり、疑問点を質問できなかつたりした生徒たちも、すぐにこの形式の授業に慣れ、今では積極的に質問する姿も見られる。古典文法でも同様に、教え合いやゲームを取り入れた実践を行い、一定の成果は感じている。

しかし、古典作品への理解や深い学びに、ここからどのようにもっていくかが今後の大きな課題である。自分の考えを答えさせるようなオープンな質問を用意しなければならない。またそこから、生徒一人一人がその質問を思考し、答えることができる力を少しずつ身につけていきたい。

**参考書籍** ・西川純編／今井清光・沖奈保子著  
「すぐ実践できる！アクティブ・ラーニング高校国語」(2017.5)

**資料**       **【国語科 01】**       **【国語科 02】**